



ボストン研修 ～HSPH (Harvard T.H. Chan School of Public Health) を訪れて～ 3/19-3/26

藤崎 照世 (新3年生)

渡航先での活動内容

- (1) HSPHでのDr. Ichiro Kawachiによる授業を聴講
- (2) Dr. Ichiro KawachiのSocial and Behavioral Sciences(SBS)研究室訪問
- (3) HSPHに留学なさっている方々との座談会、ポスドクの方への個別インタビュー
- (4) Harvard Center for Population and Development Studiesが実施するセミナーへの参加

(↓左から順に(1)、(2)、(3)、(4)の写真)



目的を達成できたか・将来の進路決定へどう影響したか

私がこの学科を選んだ理由として、ソーシャル・キャピタルという人間関係を社会資本と見なす考え方に感銘を受けて、それと予防医学、特にメンタルヘルスの繋がりに関して研究し、健康格差のより小さな社会を実現するために自分に何ができるか学びたいと思ったことが大きいです。ソーシャル・キャピタルを医学と結びつけられたイチロー・カワチ教授を自ら訪ねたいと思ったのも、そのためでした。

実際にカワチ教授のもとで研究なさっている方々とお話していると、ソーシャルキャピタルに関しては相関関係だけでなく因果関係を統計的に明確に証明するのがとても難しいと言われました。

しかし難しいということはやりがいがあるということでもあるので、卒業論文で研究したいという思いがより強くなりました。

グローバルな視点とは何か

医療は社会制度や文化と密接に関わっているゆえ、ある国でなされた研究が必ずしも他国でも当てはまるとは限りません。しかし、人間一般の特性では共通している部分も多く、それを上手く活用するには適用できる範囲を見極めなければなりません。そのためには、各国での社会背景と医療政策の両方を理解することが大切であり、研究におけるグローバルな視点を獲得することに繋がると思います。

目的以外に学んだ点、反省点

忙しくされている方でも丁寧に応対して下さり、また親身になって研修をサポートして下さることに感謝する日々を過ごしました。そのような温かい「おもてなしの心」を、改めて思い出させられたように思います。自分自身がもてなす側になったとき、見倣いたいです。

後輩へのアドバイス

- ・【英語】研修先で最大限のことを得られるように、関連する内容の本や論文などを英語で(あるいは行き先の言語で)読んでから行くと良いでしょう。私は訪問先の教授が執筆なさったものを英語で読んでから研修に参加したこともあって、語学の面で苦労することはほとんどありませんでした。
- ・【交通手段の事前準備】スマートフォンやパソコンを持ち歩くにしても、電波が通じなくなる可能性や紛失する可能性は否定できません。そのため、GPS機能に頼りすぎず、今回私がしたように路線図や地図を日本でプリントアウトして持っていくこと、2通り以上の経路を考えておくことをお勧めします。どこで何に乗り換えるかを覚えておけば十分ではないかと思われるかもしれませんが、電車が遅延していたり工事中だったりして予定とは異なるルートを使わざるを得なくなることも想定しておきましょう。
- ・【乗り換えに注意】慣れない土地での乗り換えで間違えないとは限りません。特に電車とは違ってバスは、どちら方面なのか駅に明示されていないことが多く、逆方面のバスに乗る人が沢山いるという話を聞いたことがあります。そんなときも、焦らずに気付いた時点で引き返しましょう。またこのミスに早く気付くためにも、途中駅を事前に調べておくことは有効です。
- ・【研修先に関する事前調査】よく言われることではありますが、訪問させて頂く立場として、研修先の施設やお話を伺う相手の方に関するバックグラウンドは予めある程度頭に入れておいた方が、失礼にならず、理解も深まると思います。

研修支援制度に望むこと

予算の都合もあると思いますが、もう少しだけ長期間いられたら、折角の海外渡航をより充実したものにするかもしれないと思いました。訪問先の方々は非常にお忙しいことが多いと思いますので、より長い時間の滞在が可能になれば、訪問先の方々との交流や意見交換がもっとできるからです。

1つの案として、渡航先ごとに交通費や物価が異なるので、ヨーロッパやアメリカなど遠い地域とアジアなど比較的近い地域とに分けるなど、支援の幅を調整するのも良いのではないかなと感じました。